

イザヤ書1章18節 「主と論じ合う」

1A ウジヤの時代の不正

2A 主の前への出頭

1B 「来なさい」の招き

2B 明らかにする神

3A 罪の赦し

1B 緋や紅のような赤さ

2B 雪や羊の毛のような白さ

本文

今日からイザヤ書に入ります。私たちはついに、長いことかけて、詩歌という部分を読んできました。ヨブ記から始まり、そして先週、雅歌を終えました。そして私たちは預言書に入ります。そして、預言書の中で最も代表的な書物はイザヤ書です。キリストについての預言がこれほどたくさん、そして詳しく預言されているところはありません。新約聖書で、イエス様がしばしば引用したのもイザヤ書です。そしてイザヤ書は、聖書の中でもその中に聖書全体のメッセージが入っているとされます。神の福音が、私たちに与えられています。ですからぜひ、午後礼拝に出てください。そしてイザヤ書を初めから一節ずつ読んでいきましょう。

今朝は、1章18節に注目したいと思います。「**「さあ、来たれ。論じ合おう。」と主は仰せられる。「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」**

1A ウジヤ時代の不正

イザヤ書の背景を知るには、私たちはずっと前に読んだ、列王記第二と歴代誌第二のユダの王たちの話を思い出さなければいけません。ウジヤ王から始まり、ヨタム、アハズ、そしてヒゼキヤ王までの時代に、イザヤは預言を行なっていました。ソロモンが死んでからイスラエルの国が南北に二分しましたが、北イスラエルは紀元前722年にアッシリヤによって、その首都が陥落し、捕え移されました。そして南ユダは586年、アッシリヤの後に台頭するバビロンによって捕え移されず。ウジヤの時代は、その北イスラエルのアッシリヤによる捕囚の前のことです。そして、今、読んだイザヤの預言は、おそらくウジヤがまだ生きている時に預言したことであると思われます。

北イスラエルと南ユダの王の年代記を読みますと、不気味なことがあります。北イスラエルでは、ウジヤと重なる時にヤロブアム二世が治めていましたが、その時に最も北イスラエルが栄えた時でした。領土が、レボ・ハマテというシリアにあるところから紅海に至るまでの領土を回復したとあります。そして南ユダにおいても、ウジヤは有能な王であり、彼もその国を非常に豊かにし、強くし

ました。しかも、ヤロブアムとは異なり、ウジヤは主なる神のみに仕え、偶像は拝みませんでした。

ところが、そのように二国が大きく強くなった後は、急降下で弱体化し、その間に北にアッシリヤの国が台頭して、そして北イスラエルが滅びたのです。国が豊かになり巨大になったからこそ、その萎みかたは急速で、滅びに向かっているのだということを感じさせます。南ユダも同じ道を辿りました。しかし、ヒゼキヤまたヨシヤの宗教改革によって、その寿命が引き伸ばされたことができます。私はこの世界全体の寿命も近いのではないか、つまり終わりが近づいているのではないかと感じます。これほど技術が発達して、豊かさを得て巨大化した文明ですが、その根底にある価値観が崩されるような出来事が連続して起こっています。これまでの豊かさの蓄積があるから、何とかつなげて生きられるものの、一気にそれが縮小化されて破壊されてしまうのではないか、という感触を持ちます。具体的には、黙示録などで終わりの日の災いが書かれている通りです。

けれども、イザヤはそれがユダという国、またエルサレムという神の宮のある都の中でその兆しがあることを、ウジヤの時代から感じ取っていたのです。ウジヤ王自身は主を求めていた人であり、民も神殿礼拝をきちんと行っていましたが、その中で何か神の真理から離れ、妥協しているものが徐々に侵入してきていたのでしょう。ウジヤが統治する国において大きな豊かさ、また強さを享受することができましたが、それによってなおのこと自分たちは祝福されているのだと思っていたのではないかと思います。しかし、人々の動機が果たして神を求めることだったのか、むしろ異質なものが心の動機においてはあったのではないか？という疑いを持つのです。イザヤの語る言葉は、「ああ。罪を犯す国、咎重き民。(1:4)」という、非常に重い宣告でした。厳しい叱責の言葉でした。

実は中身がなく空しかったのに、寸法だけが大きくなる綿飴のように、形だけはたくさん人々がいても、そこに中身がない。間違った動機で人々が集まるということはありません。イエス様についていった群衆の多くがそうでした。彼らは勘違いしていました。エルサレムに入城された時には、その町中が騒然となるほど民衆の歓喜がありましたが、それが数日後に一気にしぼみ、そして12人だけの弟子になり、さらにその一人はイエスを裏切る者であったというところまで縮小しました。動機が初めから異なっていたのです。

イザヤの初めの言葉は、まるで神を知らない異邦人に語る言葉であるかのようです。今読んで、1章18節は、初めて福音を聞いて罪の赦しを得るための約束として与えられているように見えますが、実は、神を知っているはずの民に対して語られている言葉です。しかも、神の知識を持っている人々、神殿礼拝に熱心に通っている人々に対して語られた言葉なのです。

ラオデキヤに対して語られたイエス様の言葉を思い出してください。ラオデキヤも豊かな町であり、その教会も豊かでした。そして、人々はそれだから自分たちは祝福されていると思っていました。ところが、イエス様は七つの教会の中で、最も強い言葉で叱責されたのです。「黙示 3:15-17

わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、冷たくもなく、熱くもない。わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。このように、あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、衰れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。」そして、イエス様は福音の招きをしました。「3:19-20 わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。見よ。わたしは、戸の外に立ってたたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」この言葉は、しばしば伝道集会の時に伝道師が救いを受け入れる招きの時に引用する聖句です。しかし、これは元々教会に対して語られた言葉です。

なぜ、そうってしまったのか？イザヤはそれを語り始めます。ユダとエルサレムについて、主はご自分が彼らを育てた主であることを言っています。子どもを育てる方であるのに、大きくなったら彼らはご自分に逆らったと言われていきます(2 節)。そして家畜でさえ、その飼い主のことを知っているのに、彼らは神のところに戻らないと言います。主がもどかしいと感じておられることは、こういうことでした。愛をもって根気よく育てたのに、彼らはその愛を受ければ受けるほど、それに飽きてきた、ということです。愛されれば愛されるほど、心が離れていくという不思議な現象です。

ある人がこのような悪いことをしているのは、家庭環境が悪かったからだということが語られますね。確かに、そういうことが多くあるでしょう。ところが、家庭環境のよい、主を愛する両親の中で育てられても、それでも心を狭くしていつて罪の中に生きる子供が育つということが起こります。放蕩息子のお話にある、愛する父親の中で育った二人の息子のよう、です。なぜか？愛が足りないから暴れるのではなく、愛されているから、その愛を弱さだと思って、自己中心な思いを優先させていく反抗が芽生えるのです。「神の子なら、その十字架から降りて来い。」という反抗です。力をもって自分に迫ってこないから、それが、愛ゆえにその力を行使していないにも関わらず、自分の我が儘を通して良いと思う反逆であり、自己中心性です。

イエス様は、イザヤにある預言(9 章)のとおり、暗闇の中にある、アッシリヤの支配を受けてから異邦人の圧政に苦しめられていたガリラヤから、ご自身を示されました。そして、主のところに来た人は非常に広範囲からの人々でありましたが、その行動範囲はそんなに大きくありません。いや、むしろものすごい頻度で、コラジン、ベツサイダ、またペテロの家のあるカペナウムで、ご自分のわざを行われました。そこには、イエス様の手塩をかけて育てようとした思いが込められていました。ところが、それだけたくさんの恵みを目撃していたにも関わらず、僅かでも与えられる人は感謝して変えられるのに、もっとたくさん与えられたこれらの町の人々は、悔い改めることをしなかったのです。

それで、イエス様が裁きを宣告されました。「マタイ 11:21-24 ああコラジン。ああベツサイダ。おまえたちのうちで行なわれた力あるわざが、もしもツロとシドンで行なわれたのだったら、彼らとは

うの昔に荒布をまとい、灰をかぶって悔い改めていたことだろう。しかし、そのツロとシドンのほうが、おまえたちに言うが、さばきの日には、まだおまえたちよりは罰が軽いのだ。カペナウム。どうしておまえが天に上げられることがありえよう。ハデスに落とされるのだ。おまえの中でなされた力あるわざが、もしもソドムでなされたのだったら、ソドムはきょうまで残っていたことだろう。しかし、そのソドムの地のほうが、おまえたちに言うが、さばきの日には、まだおまえよりは罰が軽いのだ。」ソドムとゴモラでさえも、もし、同じぐらいの神の御業を彼らが見ていたら、それだけで悔い改めていたのに、あなたがたはそれさえもできなかったのだ、と責めています。

2A 主の前への出頭

ですから、私たちは初めの福音を聞く必要があります。その言葉に反応して、悔い改める必要があります。悔い改めるとは、他の人のせいにしたり、周囲の環境の責任にするのではなく、自分に責任があることを認めることです。独りで神の前に出ていくことです。そして自分の心を主に探っただけ、示されたことに従って罪の告白をすることです。そして、その罪を捨てて行ないを改めることです。福音書では、罪人、取税人、遊女、その他、悔い改める人々と同じように悔い改めました。イザヤも叫びました。「1:16-17 洗え。身をきよめよ。わたしの前で、あなたがたの悪を取り除け。悪事を働くのをやめよ。善をなすことを習い、公正を求め、しいたげる者を正し、みなしごのために正しいさばきをなし、やもめのために弁護せよ。」

けれどもイザヤは、神が人々の行なういけにえ、祭司の奉仕、祈り、これらのものがうんざりすると嫌っている主の言葉も語っています。宗教的な行為によって、かえって自分の罪の姿が見えなくなるという逆説的なことが起こっています。このことも、福音書では当時のパリサイ人や律法学者が陥っていた過ちでした。私たちは、信仰歴が長いほど、あるいは聖書や教会のことを知っていればそれだけ、霊的に装うことができてしまいます。自分の知識を散りばめて、あるいは上手に祈ることによって、本当の自分を隠すことができてしまいます。それで、心にある汚れや罪を置き去りにしたまま時間を過ごすことを可能にしてしまうのです。

チャック・スミスが「祈りの生活」の中でこう言いました。「主よ、愛すべきこの人に対して、私は深い愛を抱くことができないのをあなたはご存じです」と私が言ったとします。何と馬鹿げたことでしょう。本当のことを主にお話しするべきです。「神様、私は彼が嫌いです。我慢ならないのです。彼を見るにつけ、鼻を殴ってやりたいと思うのです。」正直になりましょう。そして悔い改めましょう。「愛するべき」というその「～べき」の中に、私たちはしばしば、自分をもごまかして本当の姿を見せない過ちを犯しています。

1B 「来なさい」の招き

ですから、私たちはこの箇所にある招きに応えたいと思います。その招きは何でしょうか？「さあ、来なれ。」です。この呼びかけはイエス様が行われました、大声で叫びました。「ヨハネ 7:37-38 だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っていると

おりに、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」とても単純な呼びかけです。ここに福音があります。そこには、生ける水があるからです。主は、聖書の最後でも招きをされました。「渴く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。(黙示 22:17)」ただで受けることができます、何か自分が行ったこと、その報酬で飲むのではなく、無代価で飲むことができます。

呼ばれている対象は「渴く者は」です。私たちは何をしたら、霊的に渴いてしまうでしょうか？罪を犯して、それを告白していないことです。ダビデは罪を犯した後に、それを隠していた時は、骨髄まで、夏のひでりで乾ききったと言いました(詩篇 32:4)。ありのままの自分を持っていかないで、無代価であるというその恵みを受け入れないで、何か自分で自分を守って、つくろった自分を持っていこうとしてします。その魂には、自ずと渴きが出てきます。そんな自分でいたら、心が渴いてしまいます。このようなどうしようもない自分を、イエス様の前に持って行くのです。

もし、自分には心の葛藤がある。これは正しいと分かっているけれども、それができない。だから苦しい、と思われる方は幸いです。なぜなら、その葛藤こそが霊の渴きを表しているからです。そのままの心の葛藤を神の前に持って行くのです。思い出してください、この福音はただなのです、主はそのまま葛藤している心に触れてくださいます。そして、そこに命の水を流してくださるのです。けれども、もし葛藤さえ抱いていなかったらどうなるのでしょうか？「私には、特に問題がないから。」ということであればどうなのでしょう？それが、先に引用したラオデキヤの教会の状態です。生ぬるいのです。冷たくも、熱くもないので、イエス様は口から吐き出してしまいます。イエス様は、わたしは愛する者をしかり、懲らしめると言われました。だから熱心になって悔い改めなさい、と言われました。

2B 明らかにする神

そして次に、「**論じ合おう**。」と言っています。これはイザヤの預言によると、法廷における弁論のことです。1章の始まりから読むと分かることは、主ご自身がイスラエルの民に対して控訴している法廷を描いていることです。天と地を証言台に連れてきて、確かに検察官の神が主張しているように、イスラエルの民がこれこれの悪いことをしていると告訴している舞台設定となっています。そして、ここの「論じ合う」というのはその延長であります。つまり、出廷して被疑者である自分が、そこで弁明するということです。

私たちは、神の前に自分を持って行かず、自分の中で問題を処理してしまう傾向があります。なぜなら、神の前に持って行ったら弁解の余地がないことを知っているからです。けれども、主の前に出て行って、自分の姿を明らかにしていただくことが必要です。「ヘブル 4:13 造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。」

3A 罪の赦し

しかし驚くべきことが起こります。自分が有罪になることは、神の前では明らかです。しかし、その悔いた魂、砕かれた魂に対して、神はすべての訴状を落とされるのです。「**たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。**」と言われます。イザヤ書 1 章から始まる、その神ご自身の私たちの対する訴訟は、実は神ご自身がその聖なるご性質のゆえしなければいけないものなのですが、しかし、神は赦したい、赦したい、憐れみたい、憐れみたいと願ってやまないのです。主は、憐れみ深く、情け深い神です。怒るのに遅い方であり、恵みを千代にまで及ばせる方です。

1B 緋や紅のような赤さ

「**緋のように赤くても**」「**紅のように赤くても**」とあります。それが罪の深さを示しています。ここの元々の言語ヘブル語では、ある昆虫に関わる言葉になっています。「紅」はシャーニーで、ある昆虫が赤い物質を含んだ卵を産みます。それを染料に用います。そしてその染料が「緋」と訳されているトラーです。これらは深く繊維に沁みこみ、糸そのものに染料が入って、決してその色が取れないようになっています。そして、この言葉は、幕屋の垂れ幕、大祭司の装束などに、緋色の撚り糸というところで使われています。

したがって、ここには二つの意味合いがあります。どちらも私たちに希望を与えるものです。一つは、私たちが自分の罪がこびりついていて、この罪はどうしようもないのだ、取り除かれることはできないのだ、というものがあっても、それは神には不可能なことではないということです。二重染のように自分の罪が自分の一部になっていて、絶対に取り除けない、これは自分のアイデンティティーにもなっているという部分があっても、それは、主は取り除く力を持っておられるのです。

同性愛者の人に対して、その同性愛を変えなさいと言うととても怒ります。どうしてかと言うと、物心のついた頃から、同性に魅かれている自分しか知らないのです。だから、それを変えなさいというのは、自分の皮膚の色を変えろとまで言われている気持ちになります。ですから、実際に同性愛権利拡大をしようとしている人は、黒人差別と同列に同性愛差別を取り上げるのです。しかし、同性愛に限らないのです。自分が、いつの間にか知らないうちに異性に対して情欲を抱きます。物心ついた時から、嘘を付いてしまいます。ある人は、いつの間にか誰かと競争しないではられない妬みの問題があります。自分がどう見られているか分からないという恐れが、初めから身に付いています。恐れも一部になっています。

けれども、福音はそれらを清める力があります。「1コリント 6:9-11 あなたがたは、正しくない者は神の国を相続できないことを、知らないのですか。だまされてはいけません。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、貪欲な者、酒に酔う者、そして、略奪する者はみな、神の国を相続することができません。あなたがたの中のある人たちは以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あな

たがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。」以前はそのような者だった、男色をする者であった、以前は。以前は、そしる者であった。緋のように、紅のように赤くても、それでも主の御名と神の御霊によって、洗われ、聖なる者とされ、義と認められるのです！

そして、なぜそんな力があるのか？それは、祭司の装束、幕屋の幕などに使われている、緋色の燃糸は、犠牲の羊の流される血、つまり罪の赦しのための血潮だからです。つまり、キリストご自身の血潮だからです。この方の血が、私たちの罪の性質をもった血と交換されたようになりました。イエス様が自分の体に私たちの罪を受け入れられました。そして、私たちの体に、イエス様の聖い血が輸血されたようになっています。使徒ペテロが言いました。「父なる神の予知に従い、御霊の聖めによって、イエス・キリストに従うように、またその血の注ぎかけを受けるように選ばれた人々へ。(1ペテロ 1:2)」私たちは、イエス様の血の注ぎかけを受けました。

2B 雪や羊の毛のような白さ

そして、「**雪のように白くなる。**」「**羊の毛のようになる。**」とっています。完全な罪の清めです。真っ白になれるのだ、ということです。けれども、もしかしたら言うかもしれません。「罪を告白して捨てても、またそのような悪い思いが出てきてしまう。」と。そのとおりです、私たちの聖化、聖められることは徐々に行なわれます。主が戻って来られる時に完全な者とされますが、それまでは徐々に行なわれます。

しかし、罪の赦しにおいて、私たちは完全な清めを体験することができます。主は全く、その罪を持ち出さないからです。私が大学生の時に、ある罪を犯したことをクリスチャンの先輩に告白しました。彼は牧師になるべく準備をしていた方だったのですが、思い切って告白しました。彼は責めるようなことは一切しませんでした。けれども、祈ってくださいました。私の目から涙がぼろぼろ出てきました。そして、僕を学食に連れて行ってきて、何事もなかったように、微笑みながらまた他の話題を話してくださいました。私は、全く快晴、晴れやかになった気分でした。すべての罪が清められたという思いでありました。全く罪を引きずらない、それを持ち出さない、まるでなかったかのようにする、愛によって覆ってくれる。こういうことをしてくれたので、雪のように白くなる、羊の毛のようになるということを体験できたのです。

いかがでしょうか？今はもうあきらめている罪の問題がありますか？また、いろいろ人や環境のせいにし続けているけれども、実は自分自身の問題だということに気づいていることはあるでしょうか？クリスチャンとしての振る舞いさえ、その負い目を隠す手段にいませんか？これを主の前に持って行けば、必ず断罪されると恐れていませんか？いいえ、そのままのあなたで来て下さい。イエス様はその傷ついたまま、渴いた魂のままですっきりと抱いてくださいます。イエス様は、無条件で愛し、受け入れておられます。そして、その傷を自分の身にしっかりと受けてくださっています。愛をもって、恵みをもって。そこから流れる御霊には、あなたを真っ白にする力を持っています。